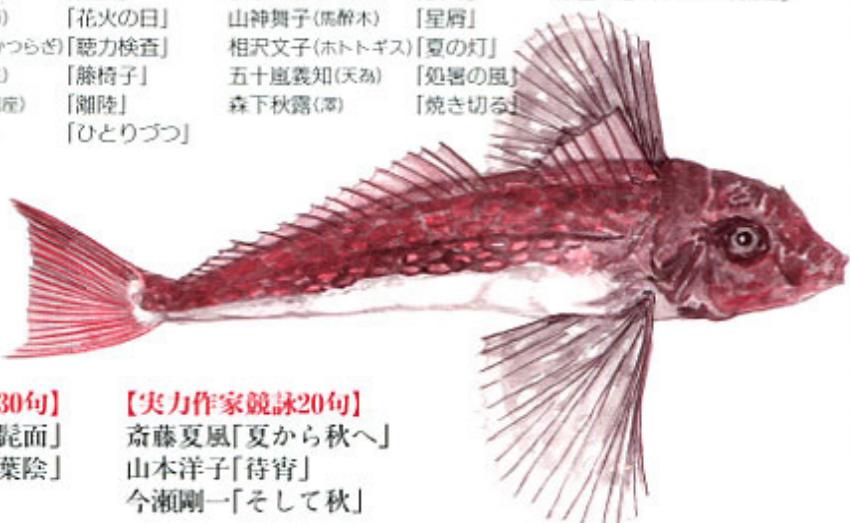


俳句通信

特別作品25句 ● 波戸岡 旭「岩頭」

特集 ● 「新鋭30人」

池水雅子(山縣)	「夏の虹」	小山陽子(やぶれ傘)	「夜瀧」	津久井健之(船)	「秋扇」
大庭龍也(海)	「秋出水」	小原澤賀信(寒雷)	「穏りゆく」	鎌田 俊(河)	「指を鼻に」
四條里美(白露)	「夏富士」	曾 敦(銀化)	「枕雲」	佐々木貴子(陸)	「晩夏」
今瀬一博(対岸)	「僻脚」	平田晶子(円虹)	「秋思」	藤井あかり(椋)	「荒草」
米澤百合(ひまわり)	「水引きし跡」	大西 朋(唐)	「夜明け」	藤田 俊(和圓の会)	「青椒肉絲」
篠塚雅世(未来園)	「開けば言葉」	池田貴之(若葉)	「花南産」	西澤日出樹(底)	「廣渡る」
平田倫子(白鳥)	「素描」	松永みよこ(王藻)	「授く」	家登みろく(萬緑)	「真紅」
本多 燐(都市)	「花火の日」	山神舞子(馬酔木)	「星屑」		
木村由希子(かつらぎ)	「感力検査」	相沢文子(ホトトギス)	「夏の灯」		
糸屋和恵(藍生)	「藤椅子」	五十嵐義知(天乃)	「処暑の風」		
関根かな(小熊座)	「脚陸」	森下秋露(草)	「焼き切る」		
木本隆行(門)	「ひとりづつ」				



【特別作品30句】

柳生正名「髭面」
望月 周「葉陰」

【実力作家競詠20句】

斎藤夏風「夏から秋へ」
山本洋子「待宵」
今瀬剛一「そして秋」

●作品●

三田きえ子・名和未知男・田島和生・
松尾隆信・小島 健・小島幸男・岩瀬喜代子・
杉浦恵子・七田谷まりうす・中村正幸・
水内慶太・四ツ谷 龍・井原愛子・小野田征彦・
杉山昭風・小林正史・児玉一江 他

●好評エッセイ●

先人に学ぶ俳句「飯田蛇笏(二)」——句集『山廬集』(二)岸本尚毅
俳句とともに「飯田龍太の風景」——句集『童眸』井上康明
川崎展宏の文集『その日』(『虚子から虚子へ』)須原和男
虚子の肖像「虚子の矜持」坊城俊樹
虚子散文の世界へ「真似のできない小説」本井 英
森澄雄の背なか「河童庵」千田佳代
地味で変な虚子句 五句集を読む「静かなる身辺」阪西敦子



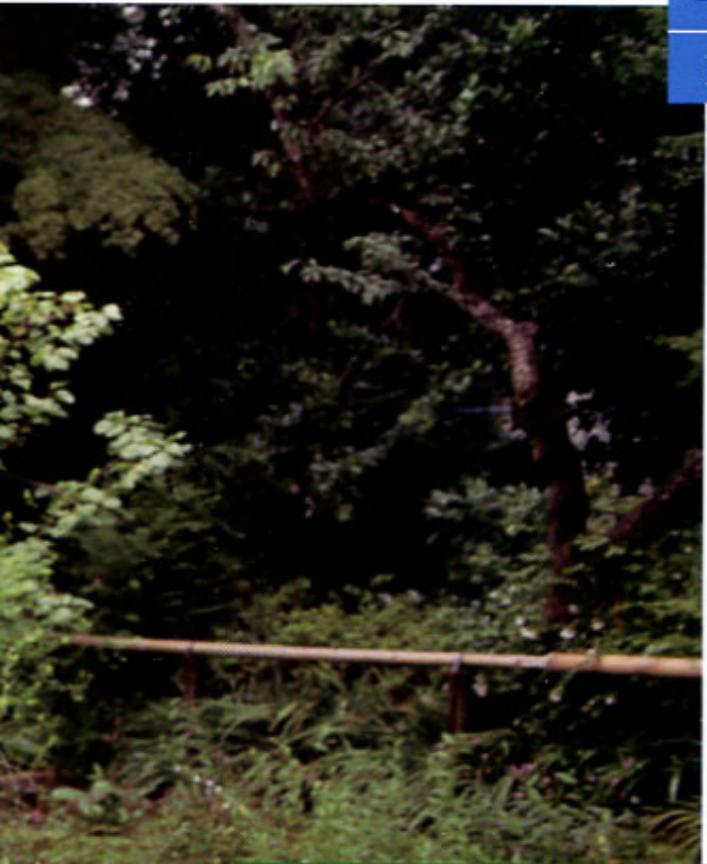
の甲 秋州

写真・大崎紀夫

仲秋の水湧いてをり殿ヶ谷戸

ほくの住む国分寺で月に一度、句会がある。殿ヶ谷戸庭園は、武藏野台地の崖線から湧き出る水を生かして築造された名園である。かつてはここを句会場にしていたが、今でも句会のある日は早めに出て園内の四季の草花をたのしんでいる。今日は受付前の棚にへちまの花が咲いていた。そろそろ予規忌かと思つたりする。萩のトンネルをくぐり竹林の径へ下りる。春には片栗の花や富貴草の咲くなぞへを廻ると池に出る。水音の絶えない岩間に一瞬かわせみが飛んだ。

鈴木しげを



麻里伊

書斎にて

秋 桜 ゆ ふ べ ひ そ か に 星 に が す

好きな散歩道に善福寺川沿いの「和田堀公園」がある。中央に中島のある池があり、いつもカメラマンが待機している。そのお目当ては鶴鶴。バズーカーのようなカメラが鶴鶴の餌場を目指して立ち並ぶ。私のお気に入りは、その傍らに立つ一本の桜の木だ。池に向って斜めにそり出し、高さに比べ枝を左右に大きく伸ばした姿は、桜紅葉のこの季節になかなかの風情である。しかし花のない桜の木にレンズが向く事はない。ベンチで一人独占している。



特集

新鋭30人

俳句人口の平均年齢が上がる一方で、

若い世代の俳句世界への参加が減つてきていると言われています。

他方、若者のインターネット句会は盛んともいわれています。

いまの若い世代はどのような作品を作っているのか、

30結社の主宰、代表、または編集長から、それぞれ50歳までの若手新鋭俳人を推薦していただき、新作10句を発表していただきました。



前列右から
谷口氏、押野氏、
星野氏、山田氏、
藤本氏

編集長 超結社句会の第24回目です。ゲストは「澤」同人の押野裕さん、「鴻」同人の谷口摩耶さん、「朝」同人の中島たまなさん、「未来図」同人の山田真砂年さん。ホストは「玉藻」主宰の星野高士さん、「泉」主宰の藤本美和子さん。遠慮のない意見交換をお願い致します。

高士 では、始めます。点がばらけました。今日は一点句が随分あるね。4点句が2つ。

裕 編んでこれつばづちを日に晒す

裕 摂(たと)め

労働の句で、様子がよく分かるような気がします。「これつばづち」という口語が生きていると思つて頂きました。たまな 職業としてではなく、趣味的に綿を作つているのだと思いました。それで出来上がりつた綿から「これつばづち」という言葉が出てきたのだと思いました。裕さんが仰つたように「これつばづち」ということばが面白いと思いました。

高士 摂(たと)め

摩耶 「綿」は、ひとつの一「綿」の実から、ほんとに手のひらにちょこっと載るぐらいしかとれない。そこに視点をあてて詠まれたんじやないかと。すごくお上手だと思いました。

わたしもい句だなと思つた。ちょっと哀れつばさが

ゲスト 押野 裕・谷口摩耶
ホスト 星野高士・藤本美和子